

六条院・三条宮物語における〈継子・二人妻譚〉と〈平中〉引用

——雲居の雁・玉鬘をめぐる——

小山 清文

『源氏物語』の主人公光源氏が藤原氏との政争（入内・立后争い）を制した後、女君を結集した風流の殿堂、六条院が建設され、それ以後は六条院を舞台にして、新たに引き取られた玉鬘を中心に据えた求婚譚が繰り広げられていく。また、その玉鬘求婚譚を挟むような形で、元服を済ませた夕霧と雲居の雁の恋がそれと並行して、祖母大宮の邸宅、かつての藤氏左大臣の本拠地であった三条宮を主たる舞台にして語られていく。そして、時に六条院及び三条宮の物語が互いに参照し合い、物語の抱え持つ問題の所在を効果的に映し出すべく構造化されていると思われ、本論の表題に示したような、「六条院・三条宮物語」という枠組み・観点からの物語解説の必要性かつ有効性が実感されるのである。

そこで本稿では、少女巻から第二部の世界までを視野に入れて、光源氏と内大臣という両大臣家の子女としての玉鬘や雲居の雁の結婚をめぐる、いかなる問題意識のもとでどのような物語展開がなさ

れているのか、特に〈継子譚〉や〈二人妻譚〉などのかかわりに注目しつつ考えてみたいと思う。さらに、『源氏物語』における『伊勢物語』引用のあり方をめぐって、〈在五中将〉と対照的ともいうべき〈平中〉の影が感知されることの意味についてもふれてみたいと思う。

一 夕霧・雲居の雁物語と伊勢物語二十三段、及び潜在する〈継子譚〉

まず考察の起点として、夕霧と雲居の雁の幼恋の物語とそのプレテクストとして既に指摘のある『伊勢物語』二十三段の關係について、あらためておさえておきたい。『伊勢物語』の二十三段は前半の幼恋の成就と後半の〈二人妻〉の話型から成るが、全篇を通して夕霧・雲居の雁の物語と大筋において以下のような共通性を有しているといえる。

すなわち、『伊勢物語』二十三段の前半部は、少女巻から藤裏葉巻における、幼馴染の恋——相思の稚い男女をめぐり女の親による妨害（二人の隔離）を経て結婚へと至る展開とほぼ対応し、男女間でやりとりされる「井」をめぐる歌のやりとりも両者に共通している（『源氏物語』では夕霧と雲居の雁の結婚後に「いさら井」をめぐる歌の唱和が見出される。藤裏葉③四五六〜四五七）（注¹）。さらに、その後女の親であったり兄であったりと事情は随分と異なるものの、両物語とも女の親族の死を契機に、男は新しい女と契ることになり、それまで他の女に脇目もふらずに女との結婚を成就させた男に変化が窺える（夕霧も折にふれ語られていた「まめ人」ぶりがにわかには薄らいでいく）。〈二人妻〉の物語は、長年仲睦まじく暮らしていた夫婦の夫がにわかには「まめ」さを失い恋にひた走るというように、「まめ男」の逸脱の物語として語られていく場合が多く、夕霧の「まめ」性が強調されていた第一部の時点から既に第二部における〈二人妻〉的物語の展開への可能性を内包して語られていたということもできよう。

その一方で、夕霧と雲居の雁の物語は、後半の〈二人妻〉の部分においてはズレを際立たせてもくる。例えば、風流さを保持する〈本の妻〉と家事に埋没して気を許してしまう家刀目的な〈今の妻〉の逆転（若葉下④二〇三・横笛④三六〇）（注²）や、忍耐型の〈本の妻〉からそれだけにとどまらずに時に嫉妬のあまり逆襲的行為にも及ぶ人物像への変換（夕霧④四二六〜四二七）、〈本の妻〉の親の有

無や〈今の妻〉の未亡人という設定などは『伊勢物語』とは大いに異なり複雑化している。そして、最も大きな相違点は、〈本の妻〉との一対一の夫婦仲の完全な復縁がもたらされず、かわりに二人の妻のもとに毎月十五日ずつ通い分けるという結末が用意されている点であろうか（匂宮⑤二〇）。

なお、本意に適った結婚に至るまでの試練の時期の物語が、『源氏物語』では「玉鬘十帖」となっておりかなり肥大化しているが、そこには二人の隔離のみならず、〈継子〉としての試練も潜在しているものと思われる。

*

念願の結婚が成就するまでの、夕霧と雲居の雁の二人に課された試練は、隔離だけではなく、〈継子〉的境遇の期間を耐え抜くというものでもあったのではないか。ここでは特に雲居の雁について考えてみたい（注³）。

女は女御といま一ところとなむおはしける。わかんどほり腹にて、あてなる筋は劣るまじけれど、その母君、按察大納言の北の方になりて、さしむかへる子ども数多くなりて、それにまぜて後の親に譲らむいとあいなしとて、とり放ちきこえたまひて、大宮にぞ預けきこえたまへりける。女御には、こよなく思ひおとしきこえたまへれど、人柄、容貌などいとうつくしくぞおはしける。（少女③三二）

雲居の雁が大宮の三条邸に引き取られたのは、引用本文に引き続

き、「冠者の君（夕霧）、ひとつにて生ひ出でたまひしかど、おのおの十にあまりたまひて後は、御方異にて」とあることからすれば、十歳よりもはるか以前のことにように推測され、少なくとも弘徽殿女御が冷泉帝に入内する前のことであろう。正妻腹の女子は早くから将来の入内に備え大切にかしずられたであろうが、雲居の雁に対してはそこまで強固な政治的思惑をもって待遇されてはいなかったように思われる。「わかんどほり」の母君は内大臣との仲が絶えてしまった後にみごとに按察使大納言の北の方におさまりゆくが、当初はかつての身寄りのない夕顔とのほかない恋のように、内大臣がたまに訪れる程度の忍び通い所の一つに過ぎなかったのだとすれば、おそらくその女子に過分な期待などかけられていなかったであろう。そう考えてみると、内大臣が雲居の雁を按察使大納言方に引き渡さなかったのは、その頃は政治的な利用価値を考慮して手放さなかったということよりも、まずは傍線部のように「さしむかへる子どもの数多くなりて、それにませて後の親に譲らむいとあいなし」という事情、すなわち、雲居の雁が大納言邸で継子であるがゆえの疎外・軽視というような差別的待遇を被らぬようにという、それなりの配慮がはたらいたものと考えててもよからう。雲居の雁は実際には大納言家における（継子）の境遇から逃れられはしたが、乳母が継父にあたる按察使大納言の思惑を執拗に気にかけて六位風情のただ人夕霧との恋を指弾する様子が描かれており（少女④四五、五七）、継父がその意図せぬところで間接的な形で継娘の恋に試

練を与えるという、未遂のまま閉じられたはずの（継子譚）の痕跡を微かに看取することもできようか。

ところで、内大臣は雲居の雁をなせ自邸に引き取らずに大宮に託したのだろうか。

・（大宮）「……かしこ（内大臣邸）にて、これよりうしろやすきこともあらじ」（少女⑤五二）

・（大宮）「……今さらに見棄ててうつろひたまふや、いづちならむと思へば、いとこそあはれなれ」（同五四）

・（弘徽殿）女御の御ありさまなどよりも、（雲居の雁の結婚は）はなやかにめでたくあらまほしければ、北の方、さぶらふ人々などは、心よからず思ひ言ふもあれど、何の苦しきことかはあらむ。（藤裏葉④四四五）

大宮の発言からは、内大臣邸に引き取られた後に正妻の右大臣の四の君から継子として冷遇されるかもしれないという危惧の念が明確に読み取られる。この北の方はかつて夕顔に対する（後妻嫉妬）により夕顔を迫害し失踪させた気性の激しい妻のイメージを有しており、（継子いじめ譚）の（継母）の造型に通ずる面があり、大宮の危惧は現実味を持ったものとして読者にも理解しやすい。そのように考えてみるならば、内大臣が雲居の雁を北の方と同居する自邸に引き取らなかった事情も、継父大納言からの疎略な継子扱いをされるかもしれない可能性を避けたのと同様、正妻北の方による継子いじめのような事態を引き起こしかねないという不安が心の内を過ったか

らではないかと想定してみることもできよう。雲居の雁と夕霧の恋仲を知って急遽雲居の雁を自邸に引き取ろうとする際も、内大臣は北の方には詳細については一切知らせずに事を運ぼうとするが（少女③五〇～五一）、それも雲居の雁に不利にならぬようにと、性急さの中にも内大臣なりの配慮が施されたものではないかと察せられる。藤裏葉巻の引用文からは雲居の雁に不快感を示す継母像が明瞭な形で浮かび上がり、それまでの雲居の雁の二条内大臣邸での待遇を推し量る手掛かりにもなるうか。

実際のところは、雲居の雁は内大臣邸においてどのような待遇を受けていたのかは定かでない。その中で注目すべき場面として、常夏巻で昼寝を实父内大臣に、「うたた寝は諫めきこゆるものを、なか、いとものはかなきさまにては大殿籠りける。」（③三九）と見咎められるという一齣がある。この内大臣の発言は拾遺集歌「たちねの親のいさめしうたた寝は物思ふ時のわざにぞありける」に拠るものと一般に注されている。そして、さらに波線部に注目して、「この引歌表現に、雲居雁の夕霧ゆえの物思ひも感取されよう。」というような説明が加えられたりしている（注4）が、「昼」という時間設定を考えると、姫君を物思いに駆り立てているのは、恋だけではなく、内大臣邸における日頃の生活上でのなにかの不如意感を想定してみる余地もあろうか。仄かに窺わせる憂愁から日常的なそれとない（継子）としての扱いからくる悲境を直叙せずに想像させ、——そんな興味深い象徴的な一齣としてこの場面を読んでおき

たい（注5）。

以上、『伊勢物語』二十三段の前半部に対応する夕霧と雲居の雁の幼馴染の恋は、「玉鬘十帖」を挟むようにして少女巻から藤裏葉巻へと展開していき、結婚までの試練が新たに（継子）としての伏在的要素を付加して、長大な「玉鬘十帖」の蔭においてひそかに練り広げられているであろうということを、雲居の雁を中心に考えてみた。

二 玉鬘をめぐる（継子譚）

次に、視点を転じて六条院の光源氏をめぐる（継子譚）についておさえておきたい。まず六条院完成に先立ち、薄雲巻では継母にあたる藤壺が亡くなり、少女巻では朱雀院にひっそりと暮らす弘徽殿太后が点描され、源氏と弘徽殿との継母子の対面後には、「源氏は）いかに思し出づらむ、世をたもちたまふべき御宿世は消たれぬものにこそ、といにしへを悔い思す。」（少女③七五）という弘徽殿の胸中が語られ、継子に対する敗北と後悔をもって一つの（継子譚）がここでも語り収められようとしている。また、六条院が完成した暁には紫の上の父の式部卿宮の五十の賀宴を執り行なうことで孝養に一つとめようと準備する源氏と紫の上についても描き出され（同七六～七七）、それは『落窪物語』の継子いじめや復讐後の、後半の孝養譚を連想させるものとなっている。このように六条院完成を一つの節目として、継子あるいは継子の夫として継子側に位置する光源氏の（継子譚）が終局を迎え、その後は六条院の深奥部を舞台にした、

新たな珍奇な〈継子譚〉が源氏を親の立場に置いて語り出されていくことになるのである。

それではさっそく六条院の深奥部で展開される光源氏と玉鬘の物語について、〈継子譚〉という観点から眺めてみたい(注6)。玉鬘は、母夕顔を失跡させる原因となった北の方の居る実父の二条大臣邸には遂に引き取られることはなく、継母北の方との接触は免れたが、継父に当たる源氏のもとに引き取られ懸想されるといふ数奇な運命をたどることになる。継父に譲り渡されなかつた雲居の雁に対し、継父の手に奪われたのが玉鬘ということになり、奇妙な〈継子譚〉が以後繰り広げられていく。

さて、懸想する継父が継娘に対し積極的に提供したのが、〈継子物語〉をはじめとする数多くの物語草子なのであった。蜚巻には玉鬘が源氏から宛がわれた物語を夢中になって読んだり書き写したりする様子が語られているが、その中で『住吉物語』という継子物についてことさらに言及されている意義については十分に注意しておくべきだろう。実はこれに先立つ胡蝶巻においても、継子物を享受していると思われる一節が見出されるのである。

いかならむをり(実父内大臣に)聞こえ出でむとすらむと、心もとなくあはれなれど、この大臣(源氏)の御心ばへのいとありがたきを、親と聞こゆとも、もとより見馴れたまはぬは、えかうしもこまやかならずやと、昔物語を見たまふにも、やうやう人のありさま、世の中のあるやうを見知りたまへば、いとつ

つましう心と知られたてまつらむことは難かるべう思す。(3)

一八三

文中の「昔物語」は、継子いじめのような物語であろうと思われ、玉鬘はそのような継子物の享受を通して、邪悪な継母のみならず実父さえもが、〈継子〉に相当する立場に置かれている姫君に対してはさしたる親身な肉親たり得ないという苛酷な世情の実態を思い知らされ、学び取ることとなり、逆に血を分けた父親というわけでもない光源氏の類まれなるありがたみが実感されるのである。そして、それこそが〈継子物語〉を玉鬘に宛がう源氏の真の狙いであったのではないかと思われる。源氏は、一つには、玉鬘を「すき者どもの心尽くさするくさはひ」(玉鬘③一二二)に仕立て上げ、多くの若く有望な貴公子たちを六条院に惹き付けようと画策し、そのために田舎育ちという点で不安のある玉鬘に対し恋のノ－ハウを身に付けさせるべく多くの恋物語を与えて学ばせたのではないかと考えられるが(注7)、その他にも、〈継子物語〉へのこだわりについては今述べたような事情も十分に考えられよう。

かくして、うわべでは物語への熱中からかったり揶揄したりするのとは裏腹に、とにかく源氏の様々な思惑に基づいて数多の物語草子類がこの東北の町の西の対に次々と集められ、玉鬘の入居前には書籍・文書類が納められていた〈文殿〉であった場所(玉鬘③一二五)が今や仮名の物語草子類が集積する〈草子殿〉へと俄かに様変わりを遂げたのである。ちなみに、「日本紀などはただかたそは

ぞかし。これら(物語)にこそ道々しくはしきことはあらめ(童
 ③(二二二)と笑う源氏の脳裏にはこのような西の対の急変——「丑
 寅の町の西の対、文殿にてあるを他方へ移して」とあるように、
 殿が「かたそは二片端などへと除^おけられてしまい、跡地が華やか
 な〈物語草子殿〉と化した光景——が幾分諧謔味をともなつて意識
 されていたのではないだろうか。

なお、玉鬘の周囲に物語類が取り揃えられるということ、すなわ
 ち〈文殿 〉から〈草子殿〉への変転は当初からある程度予想された
 ことで、むしろこのように模様替え——〈文〉と〈草子〉を同列化
 して置換してゆく構図を描き出すために、玉鬘の人居場所を〈文殿〉
 と設定した可能性すら考えられよう。ここに、女子教育にあつ
 て、男子にとつての〈文〉と同程度に〈草子〉を重視する光源氏
 のあり方が映し出されようとしているのではあるまいか。源氏は玉
 鬘の他に明石姫君にも物語を数多く与えている。ただし、玉鬘の場
 合とは対照的に、紫の上との関係を考慮して継子物は注意深く除外
 される。従来この配慮のみが注目されてきたきらいがあるが、先述
 のとおり玉鬘に対しては積極的に継子物を選り抜いて読ませるよう
 な環境を源氏自らが用意していると推察され、源氏の思惑にしたが
 った物語提供法が六条院の姫君教育に深く関わっていることが確認
 できよう。たとえば、玉鬘のもとに寄せられた恋文を源氏の厳選と
 承認を経た上で初めて玉鬘が目にするように、物語草子類も源氏の
 監視下において六条院世界での流通が許可されるという仕組みが暗

黙の了解事項となっていたのだろう。なお、源氏による男子教育は
 少女巻における夕霧に対する教育方針において既に語られており、
 男子教育には〈文〉を、女子教育には〈草子〉を、というように数
 少ない子をめぐる男女それぞれの場合の源氏独自の教育上の戦略が
 少女・童の両巻に振り分けられて語られているのだといえよう。

三 〈継子譚〉から〈二人妻譚〉へ、逸脱と多様化

さて、玉鬘をめぐる〈継子譚〉は玉鬘にいかなる結婚をもたらしたか。『住吉』や『落窪』のような幸福な結婚をもって玉鬘の〈継子譚〉は大団円に終わらずに、鬚黒との不本意な結婚はさらに思いも
 寄らぬ事態へと進展していく。「まめ人」から逸脱して俄かに玉鬘
 に入れ込んで気もそぞろがちな夫に対し、北の方の忍耐も遂に限界
 に達し、突如、玉鬘のもとへ出掛けようとする鬚黒に火取の灰を浴
 びせ掛けるという逆襲に転じたのである。途中までは夫の浮かれ歩
 きを容認し、しおらしく振る舞っていた北の方の姿はある程度(二
 人妻譚)の〈本の妻〉の造型に重なり合うものであったのだが、し
 まいに父式部卿宮邸へと立ち去ってしまい、この〈話型〉からは
 完全に逸脱していく。このように玉鬘の〈継子譚〉はその結末に平
 穩で幸福な結婚がすぐには用意されずに、突如、〈二人妻譚〉を抱え
 込み、視点が〈本の妻〉たる鬚黒の北の方のほうに転じられ、さら
 に〈二人妻〉の話型からも大幅にずれていくのである。また、〈二人
 妻譚〉の場合、男はおのずと二人の妻の優劣を識別する判者として

の役割を担うことになるが、鬚黒にはそのような面影は見出されず、灰まみれにされたり無断で家を飛び出されたりといったように、古妻に手を焼き散々な目にあつており、むしろ戯画化されているようである。

そして、このような〈継子譚〉から〈二人妻譚〉への転換や、悲哀なる忍耐妻から妬婦の逆襲的行為及び男の戯画化などというように、逸脱あるいは多様化の様相を見せる〈二人妻譚〉という要素は、夕霧と雲居の雁の物語の根幹においても引き継がれていくことになる。既に第一節に述べたように、夕霧と雲居の雁の物語が『伊勢物語』二十三段を踏まえつつ創り上げられているのであれば、〈二人妻譚〉への接続は当然の成り行きとして理解されるのであるが、それにしても鬚黒や夕霧をめぐるずらされた〈二人妻譚〉という発想はどこからもたらされたものなのか。それを考える際に注目したいのは、『伊勢物語』二十三段とはほぼ同内容ともいうべき『大和物語』百四十九段の存在である。この話には、『伊勢』にはない、嫉妬のあまり金碗に張った水を胸に押し当てて高温の湯に変えてしまうというすさまじい妬婦の姿が独自に描き出されており、『源氏物語』は『伊勢物語』二十三段と同話的關係にある『大和物語』百四十九段の要素を加えた上で〈二人妻〉の物語を取り込んだのではないかと考え得てみる。ことができるのである。

さらに、『大和物語』の〈二人妻譚〉の中で注目すべきものに六十四段の平中の話があげられる。これは、平中が妻と暮らす家に別の

女を連れてきたものの、最終的には妻により追い出されてしまうというもので、話型としてはむしろ〈二人妻〉というよりは〈後妻嫉妬〉とみなしたほうが適切であるかもしれない。ただし、この話の妻も本来はそのような面を見せない妻であったからこそ平中も気を許して女を呼び入れることにしたのであるうとも推察され、いきり立つ妻の急変に圧倒され果然と立ちすくむより他ない、なすけなくだらない男の姿が印象的に映し出されている。そして、このような忍耐妻の急変・逆上・逆襲とそれに手をこまねいている夫の姿は鬚黒や夕霧の夫妻の造型と通底し合う面があるのではなからうか。

また、『源氏物語』の場合は、戯画化される男の造型とは対照的に、実家への退去を余儀なくされる本の妻や未亡人(二夫に見える女)の悲哀(夕霧④四〇八、四三五〜四三三)といったように、〈本の妻〉であれ〈今の妻〉であれ、女君の悲哀が際立つように新たな要素が加えられて物語化されているのが特徴的であるといえる。〈今の妻〉の悲哀については、『大和物語』六十四段にも語られているものであり、二夫に見える女君の悲境については、未亡人ではないものの、『伊勢物語』二十三段に後続する二十四段や『大和物語』百四十九段の前に位置する蘆刈章段などがそのような女を題材にして語られており、『源氏物語』は、一男二女型の〈二人妻〉及びその前後に接する二男一女型の〈二夫に見える女〉の物語を一括りにして捉え、そこに女君の悲哀を深々と読み取り、そうした問題意識を積極的に盛り込みつつ、鬚黒や夕霧をめぐる三角関係の物語を創り

上げていったのではないかと思われるのである。

次に、夕霧をめぐる〈二人妻〉の物語がとりあえずどのようなように語り収められていったか見定めておきたい。その場合によく引き合いに出されるのは、匂宮巻の「丑寅の町に、かの一条宮（落葉の宮）を渡したてまつりたまひてなむ、三条殿（雲居の雁）と、夜ごと十十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける。」(⑤二〇)という一節であるが、ここでは夕霧巻末部に注目しておきたいと思う。そこに語り出されるのは雲居の雁に日頃から不快に思われているという惟光の娘の藤典侍に関する話題であり、ひっそりと夕霧の愛を受けながら多くの年月を経ているとされる。夕霧巻は雲居の雁と落葉の宮の〈二人妻〉の物語の語り収めの部分に、もう一つの蔭に隠れた、長期にわたる〈二人妻〉の構図を俄かに映し出し、それまであまりにも単純化されて物語られてきたきらいのある〈二人妻譚〉を解体しようとしているのではないか。最後の一文「この御仲らひのこと言ひやる方なくとぞ。」の中の「この御仲らひ」が誰と誰の仲らひを指すものなのか、諸注での見解はまちまちであるようだが、「夕霧と雲居の雁」、「夕霧と落葉の宮」、「夕霧と藤典侍」、「雲居の雁と落葉の宮」、「雲居の雁と藤典侍」はたまた「落葉の宮と藤典侍」や、更には藤典侍腹の一男一女を引き取り養育することとなる花散里や、光源氏に至るまで、結局のところはどこにポイントを置いて〈読む〉かによって、さまざまな組み合わせの〈仲らひ〉がそこには代入可能であるように思われる。〈二人妻〉ならぬ〈多妻〉空間の六条院の

内的世界を描いてきた延長に語られるものであるだけに、『源氏物語』はこの段階において、さまざまな男女や女同士の仲らひの容易には語り尽くしようのないドラマがあることをしかと見据えつつこの巻を閉じようとしたのではあるまいか。そして又、さまざまな「仲らひども」の中に決して埋没していくことのない特別な「仲らひ」として、それぞれが主題を担い得る固有の「仲らひ」として、語られざるその先に読者各々の脳裏においてそれぞれの一つだけしかない「仲らひ」についてじっくりと思念されることをそれとなく折り込めたのではなからうか。

四 〈平中〉引用による烏滸物語化

前節において、悲哀感の増してゆく女君とは対照的に戯画化されゆく男性像について述べたが、それを効果的に促進したものの一つに、例えば『大和物語』六十四段の男Ⅱ平中との重なりがあげられようか。殊に夕霧をめぐる物語における『伊勢物語』二十三段の影響は、前節にも述べたように『大和物語』の〈二人妻譚〉の百四十九段のみならず、〈後妻嫉妬〉の要素がさらに強化された同物語の六十四段をも連鎖的に連想させ、当時すでに滑稽譚で知られた〈平中〉像が夕霧に忍び寄りつつある状況が垣間見られるのである。

さて、本節で注目したいのは夕霧巻における夕霧の戯画像形成に、やはり『大和物語』の平中の話である百三段が深く関わっているのではないかということである。この点については既に指摘があ

るものの（注き）、あらためて関係をおさえてみたい。この話は、市で或る女を見初めた色好みであだ人として有名であった平中が、その後女と契りを交したものの、翌日以降、役所の長官や帝への随伴を余儀なくされ、音沙汰のない日が続き、事情を知らぬ女が一方的に男に捨てられたものと思ひ込み絶望した挙句の果てに、家の者にも知らせぬうちに髪を切り尼になってしまい、そのような事態を使いの者から聞いた平中があわてて女のもとにやってくるが、女は塗籠に籠り面会を拒絶するという内容であり、女の側が男側の事情をよく理解しないままに男側の不実な態度に一方的に失望し悲劇が訪れるという点が夕霧と落葉の宮をめぐる物語展開上のポイントとよく似ていると思われる。

もう少し細かく見比べてみることにする。展開上のポイントは共通点があるものの、細部においてはざらざらされていたり対照的に設定されていたりする。まず、女について、『大和』の場合は処女であり男女が契りを交して物語が本格的に始まることになるが、落葉の宮は未亡人であるし、夕霧と結ばれるのは夕霧巻の末部のほうであり、大きく異なっている。契りを交した翌日以降（といっても、夕霧巻のほうは落葉の宮の母一条御息所が勝手にそう見なしているものであるが）の男の不訪・無沙汰は両者に共通するものである。平中の話の最大のポイントは、男側の事情を女側が知らされないままに誤解あるいは早合点してしまふという点であろう。『大和』はそれが劇的・効果的にあらわされるような構成となっている。こ

の（誤解）に関しては夕霧巻はかなり複雑に仕組まれているようである。そして、誤解により心痛めるのもまた落葉の宮本人ではなく、その周辺の人々になっている。朝霧の中を去り行く夕霧を見て落葉の宮との仲を小野の律師たちが誤解し、それを聞いた母御息所もショックを受ける。また、平中が上司や帝への随伴という公的な理由で訪れられなかったのに対し、夕霧のほうは（一条御息所にとっての）二晩目は、「今宵たち返りまでたまはむに、事しもあり顔に、まだきに聞き苦しかるべしなど念じたまひて」（夕霧④四二六）、もともと訪問するつもりはなかったし、御息所からの文は雲居の雁に奪い取られたために返書のためにもなく、それすら間をおいてしまふことになる。これは公的なものとは程遠い、妻の嫉妬によるきわめて私的な事情による無沙汰であった。ようやく文を発見して「胸つぶれて」（同四三二）も、悠長なことに宮との結婚を意識して、陰陽道で万事に凶とされる「坎日」を避けて自ら訪れることはせず文で対応している（語り手からも「うるはしき心」（四三三）と皮肉られる始末である）が、この訪問ならぬ「文」が御息所を絶望死させることになってしまふ。平中のほうは、随伴後、やはり陰陽道関係の「方塞がり」ゆえに方違えを余儀なくされるが、翌日になって女からの使者を目にするなり、「胸つぶれて」、女が出家したと聞いて、暮れ方を待たずに「すなわち」女の家を訪うている。なお、夕霧巻には、雲居の雁が夕霧が目を凝らして読んでいる御息所からの文を落葉の宮からのものと誤解したりするところもあり、

『大和』における〈誤解〉が招いた悲劇を意図的に複合的に創り直しているように思われる。ちなみに、「御座の奥のすこし上がりたる所」(四三三)に文をようやく発見した夕霧が何でこんなところにあったのに今まで気付かなかったのかと我ながら愚かしく思う場面について、たとえば「雲居雁は、手紙を渡すのが気がひけて、そつと夕霧の御座の下に入れておいたか。」(注9)と注記されたりしているように、こんなところにももしかすると愚かしい〈誤解〉が張り巡らされていると想定し得るのである。

また、『大和』の平中は、確かに「あだ人」として有名であったかもしれないが、本文に拠る限り、武藏守の娘とのことはあくまでも宮仕えが弊害となって心ならずも通えなかっただけであるのに仕える者たちからも浮気者と見なされていて、この局面に関してのみ言えば平中が不実者としての濡衣を一方的に着せられてしまっているかのようである。夕霧のほうにも同趣のことは言えそうでもあるが、それ以上に注意すべきは、夕霧が落葉の宮に接近するとき、逆に「濡れ衣」を意識的に口にして、女に迫ろうとする場面に幾度となく遭遇することである。(「濡れ衣」：四〇九、四一一、他に「なき名」「えしもすずぎはてたまはじ」：四四七。ちなみに「濡れ衣」全五例中の四例が夕霧巻、「なき名」全二例中の一例が夕霧巻に見られるものである。)(注10) こうした夕霧像の発想源の一つとして『大和』百三段の反転といった取り込みも加えてよからうか(また、後述する〈懲りすま〉との関係から、古今集六三二番歌の「懲りすま

に)またなき名は立ちぬべし人憎からぬ世にし住まへば」などに注目してみる余地もあるだろう)。

さて、平中の場合は女側の〈誤解〉により独断・性急なる出家という結末がもたらされるが、夕霧巻の場合はどうか。こちらは、落葉の宮ならぬ母御息所が絶命してしまい、落葉の宮は出家を望むが周囲からそれを阻止されてしまう(夕霧四四九、四六四)。また、「なほいとひたぶるにそぎ棄てまほしう思さるる御髪をかき出でて見たまへば、六尺ばかりにて」(四六三)というところは、『大和』の「いと長かりける髪をかい切りて」の部分を意識した表現と見なせようか。夕霧も「落葉の宮が」もしなほ本意ならぬことにて尼になども思ひなりたまひなば、をこがましようもあべいかな、と思ふに」(四七四)と案じているが(さらに雲居の雁までが尼にでもなってしまうかと言いつつ始末である。四七五)、落葉の宮には出家の道は閉ざされている。なお、平中の話の〈独断・性急な女の行為〉という点では、むしろ父の致仕大臣邸に無断で帰ってしまう雲居の雁が「いと急にもしたまふ本性なり」(四八三)と指弾されているように部分的に当てはまるところがあるか。結局、この巻においては雲居の雁は訪れた夫との面会を拒み通したまま語り終えられてゆき、その点も塗籠に籠って平中との面会を拒んだまま閉じられる『大和』に通ずるものがある。一方、最終的には身を許すこととなるものの、落葉の宮の夕霧拒否の際に語られるのが他ならぬ(塗籠籠り)であり(注11)、これは夕霧巻が『平中物語』三十八段ならぬ

『大和物語』百三段のほうを踏まえつつ語られている有力な証左となるであろう。『大和物語』百三段は、『平中物語』に見られない〈塗籠〉の記述の他に、冒頭部において動詞「色好む」を三度にわたり使用してみせるという特徴も有しており、かえって々々まめ々々夕霧との対照が皮肉的に際立つ効果をあげていよう。ちなみに、緋色の女に惹かれる平中に対し、夕霧のほうは「浅緑」＝六位の袍の色の屈辱に今なおこだわり続けており（夕霧の心情に即した「緑の袖」や「浅緑」への言及が、たとえば螢③二七、藤裏葉④四五五の他に、夕霧④四二九にまで見出される）、平中・夕霧ともに〈色〉へのこだわりはあるものの、その意味するところは全く異なっている。最後に女の身分について、『大和』の女＝「武蔵の守のむすめ」と落葉の宮は、いくら〈落葉〉であるとはいっても両者には相当の身分上の開きがあるが、落葉の宮の母＝一条御息所の甥の和守が御息所の死後に俄かに登場し諸事にわたり切り盛りする様が語られ、それによって母の家系が受領層であろうことが仄めかされ、両者の身分上の懸隔を多少埋め合わせることになっているようにうかがう。

以上に述べた点などからも、夕霧巻と『大和物語』百三段の平中の話の密接な関わりが理解されるであろう。類似点の他に、ズラシや対照的な点も見られたりしたが、それらによって浮かび上がるのは、夕霧の暢気さやだらしのなさ・愚かしさ、いやらしさなどで、いずれも夕霧を批判的に烏滸化しようとする物語の姿勢が読み取れたと思う。夕霧は「女郎花しをるる野辺をいづことてひと夜ばかりの

宿をかりけむ」という御息所の文に対し、「この御咎めをなん。いかに聞こしめしたることにか。秋の野の草のしげみは分けしかどかりねの枕むすびやはせし 明らかきこえさするもあやなけれど、昨夜の罪はひたや籠りにや」（夕霧④四三三～四三四）と、まさに「うるはしき心」によって応じているが、御息所が二人の間の実事の如何以上に気にしているのは、「内々の御心清うおはずとも、かくまで言ひつる法師ばら、よからぬ童へなどはまさに言ひ残してむや。人は、いかに言ひあらがひ、さもあらぬことと言ふべきにかあらむ。」（四二〇）というように、「軽々しき名の立ちたまふべき」同一事態にいかに対処するかということなのであって、事実をめぐり弁明しようとする夕霧との意識の懸隔には相当の開きが見られるのである（注12）。ある意味では、ここにも母御息所の心意を読み切れない夕霧の〈誤解〉があるろう。要するに、夕霧巻は、プレテクストの〈早合点・独断・性急な女の物語〉を〈無理解・暢気な男の烏滸物語〉へとみごとに変換なし得たのだといえよう（注13）。

五 〈在中〉引用から〈平中〉引用へのパロディ化

夕霧と雲居の雁の物語は、少女巻をはじめとする第一部——〈幼馴染の恋〉の物語においては『伊勢物語』の二十三段の前半部を根底に踏まえて語られ、次なる第二部の〈二人妻〉的情况（特に夕霧巻）は、『伊勢』よりもむしろほぼ同話の關係にある『大和物語』百四十九段の方の要素を取り込み、さらに『大和』の六十四段の平中

譚にも近づけながら語り進められ、ついには『大和』のもう一つの平中譚——百三段をも引き寄せて語られていく。そしてそのようなプレテクストとのかかわりに着目するならば、在五中将業平を思わせる『伊勢』引用から始まった世界がしまいに平中貞文の烏滸的世界へとパロディ化の度合を強めつつ進められていく様子が読み取れると思われる。夕霧巻においても、例えば、小野の山里の宮のもとからすぐごと帰京する男に注目して、『伊勢物語』八十三段などの惟喬親王の章段の引用が見られてもよかったようにも思われるが、物語は今述べたように『大和』の『平中譚』の方をより強く意識して取り込もうとしているようである。

そして、このようないわゆる〈在中〉引用から〈平中〉引用への逸脱・パロディ化的傾向は夕霧に限ったものではない。第一部においては『伊勢物語』の二条后章段を踏まえつつ語られていた源氏と朧月夜の君の第二部の場面を見てみたい。若菜上巻の光源氏の朧月夜訪問の条について、舞台を殊更に「二条の宮」と明示して「二条后」を意識して語り始められるものの、途中のあたりで「平中がまねならねど、まことに涙もろになむ。」(④八一)と一見平中像との重なりを打ち消しているようにも読めるけれども、結局は平中^{お八}番の〈嘘泣きの涙〉をわざわざ引き合いにして語られているのが目に止まる(ちなみに、夕霧巻の夕霧をめぐる、「涙もろにおはせぬ心強さなれど」(④四四〇)という一節からは、〈平中〉との乖離が印象付けられたりもするがそれでもやはり、夕霧は「すき」ならぬ「烏

滸」性のまつわりついた平中像に確実に犯されているといえよう。さらに源氏と朧月夜の君の二度目の歌のやりとりにおける「こりずま」ということは注目したい。「懲りずま」は〈平中〉像を特色付けるものの一つとしてあげられ(注四)、歌のやりとりという一つの山場が〈平中〉によって侵食されているような趣となっている(なお、夕霧の場合には「もの懲りしぬべうおぼえたまふ」(④四八四)とあるのみで「懲りずま」性は見出されない)。そしてその歌の直後には、「関守の固からぬたゆみにや、いとよく語りおひおきて出でたまふ。」(④八四)とあって、かつて二人の間に横たわっていたタブー性は消失し、緊張感の失せた色褪せたものになってしまっている。

次に、このような夕霧や光源氏をめぐる第二部における〈在中〉引用から〈平中〉引用への変質、あるいはパロディ化の意義についておさえておきたい。夕霧物語の場合は、結局は〈二人妻〉の物語の男を諷刺を込めて描き出すところに眼目があるのではないか。

またあらじかし、よろしうなりぬる男の、かくまがふ方なくひとつ所を守らへても怖ぢしたる鳥のせうやうの物のやうなるは、いかに人笑ふらん。さるかたくなしき者に守られたまふは、御ためにもたけからずや。あまたが中に、なほ際まさりことなるけちめ見えたるこそ、よそのおぼえも心にくく、わが心地もなほ古りがたく、をかしきこともあはれなる筋も絶えざらめ。(夕霧④四二八)

このように開き直り嘯く男本位の論理をも冷笑のもとに排斥し、

〔平中〕引用、あるいはそれを更にずらしたり反転させることで、従来の〔二人妻〕という話型自体に対しても、より強烈な批評精神を盛り込もうとしているように思われるのである。光源氏もまた六条院を舞台にして、〔二人妻〕ならぬ多くの妻を抱え込む様相を呈しているが、そのような源氏に対しても同様の批評精神が込められているのではなからうか。また、〔在中〕から〔平中〕への移行・置換については、かの〔在中〕にしても所詮は〔平中〕と大して変わらぬのだと言わんばかりに同等視していくようなかなり激しい物語批評がそれとなく試みられているようにも思う。第一部における頻繁な『伊勢物語』引用がおのずとそうしたまなざしを培わせることにながっていったのもあろう〔注15〕。

そして又、〔継子譚〕から〔変則型二人妻譚〕への連接が、夕霧夫妻や玉鬘らを通して描かれていたが、それは従来の〔継子譚〕の幸福な結婚という結末を排して、結婚後に妻の地位をめぐり更なる試練と向き合い生き抜いてゆかねばならぬ女たちの現実を踏まえて語り続けていくことによる、必然的成り行きでもあったろう。

(1) (雲居の雁の) 御腹には、太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、中の君、四の君、五の君とおはす。内侍は、大君、三の君、六の君、二郎君、四郎君とぞおはしける。……〔内侍腹の君達し〕もなん、容貌をかしく、心ばせかどありて、みならずぐれたりける。〔三の君、二郎君は、東の殿(花散里)にぞとりわきてかし〕づきたてまつりたまふ。……〔四八九〕

これは、夕霧巻末部における、雲居の雁所生の子と藤典侍所生の子についての記述であるが、雲居の雁と落葉の宮の〔二人妻〕の他に、長年にわたる雲居の雁と藤典侍の〔二人妻〕的状況が潜在していたのだということが一挙に示される(傍線部①)のみならず、この〔二人妻〕の延長上に、いくつもの〔継子譚〕が切り拓かれてゆく可能性もまた暗示されている(傍線部②や③)ものとして注視される。結婚をはさんでの、現実在即した新たな〔変則型〕の〔継子譚〕と〔二人妻譚〕の繰り返しの連鎖の中に〔女〕の生が鋭く見据えられ、刻印されようとするかのような、そんな結末として意義深く読んでもおきたいと思う。

以上、三条における夕霧と雲居の雁、六条における光源氏をめぐる物語が微妙に反照し合いながら物語の抱え持つ問題意識が効果的に語り出されてゆく点について、〔継子・二人妻譚〕をめぐり考えてみた。最後に、三条の夕霧の一件に触発された六条の紫の上の思惟——「女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし」〔四五六〕と語り出される夕霧巻の一節についてふれ、結びとしたい。紫の上は、夕霧の件を通じて雲居の雁と落葉の宮の二人の女君の生をめぐり深々と思索し、そこに、結局のところこれという自己表現もなし得ぬままに男によりただ翻弄されるままの生涯を静かに受けとめていくよりほかない女の現実をしかと見定めている。雲居の雁もまた、これを機に六条院の現実を思い知るに至ったであろう。その中で、例えば「宿世といふものがれわびぬ

ることとなり、ともかくも口入るべきことならず、と思す。女のため
のみにこそいづ方にもいとほしけれとあいなく聞こしめし嘆く。」
(夕霧④四五) という光源氏の思惟が、六条と三条の間で空しく反
響するばかりであることを確認して本稿を閉じることとしたい。

注1 大井田晴彦「夕霧の幼な恋と『伊勢物語』二十三段」(『人物
で読む『源氏物語』第十六巻——内大臣・柏木・夕霧』勉誠出
版、二〇〇六)に既に指摘されている。

2 阿部好臣「夕霧の恋 システム破壊の視座——夕霧」(『国文
学』一九八七・一一)。

3 なお、〈継子〉的境遇に限定するものではないが、雲居の雁像
をその背景から丹念に読み抜いた好論として、中西紀子「幼い
恋と純情——母の無い子の人恋しさ——」(『源氏物語の姫
君——遊ぶ少女期——』溪水社、二〇〇三)をはじめとする一
連の論考がある。

4 完訳日本の古典(小学館)所収の「引歌」一覽からの引用。

5 石川徹「宇津保物語の人間像——源氏物語との比較を中心
に——」(『平安時代物語文学論』笠間書院、一九七九)や、辛
島正雄「蝙蝠と駒と昼寝の物語——散逸『こまの物語』をめ
ぐる断章——」(紫式部学芸会編『源氏物語とその前後 研究と資
料』古代文学論叢第十四輯——武蔵野書院、一九九七)に
は、〈幼恋〉や〈昼寝〉に注目した、夕霧・雲居の雁の物語の発

想源としての散逸『こまの物語』についての指摘がある。

6 池田和臣「源氏物語」における継子譚の形態分析——玉鬘物
語解析のために——」(『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書
院、二〇〇一)は、作中におけるさまざまな継子関係を検討し
たうえで、源氏と玉鬘の関係について考察し、源氏の烏滯性な
どを指摘するもので興味深い。

7 物語をめぐる男の思惑については、拙稿「源氏物語のなかの
〈愁〉をめぐる考察——絵姿の女たちの〈流離〉譚——」(『平
安文学と絵画(論集平安文学①)』勉誠出版、二〇〇一・三)や
「源氏物語の〈権力〉への一視点——政治的装置化への抗
い——」(『国文学研究』一三九、二〇〇三・三)などでも論じ
たことがある。

8 日本古典文学全集(旧版、小学館、一九七四/④四二頭注)
の他に、深澤三千男「平中物語から源氏物語への回路」(『人文
論集(神戸商科大)』二九三・四、一九九四・三)及び「平中物
語から源氏物語への回路補足」(同誌三〇一・三、四、一九九五・
三)のうちの特に後者の論文が徹底的に分析・考察を試みてお
り有益である。他に、少女巻の夕霧に平中引用を指摘する永井
崇大「夕霧造型論——『平中物語』からの水脈——」(『語文』一
二〇、二〇〇四・一二)がある。又、『竹取』引用を通して夕霧
の戯画化を見据えた井野葉子「夕霧巻における竹取引用」(『論
叢源氏物語』3 引用と想像力』新典社、二〇〇一)や、『落窪』
の典業助引用の彼方にやはり夕霧の滑稽性を見据えた瓜本誠

『落葉宮の塗籠籠もり——『落窪物語』との連関性——』（『物語研究会会報』二六、一九九五・八）などがある。

なお、『大和物語』百三段と『源氏物語』の夕霧巻以外の部分の關係について論じたものに、仁平道明「いとねぢけたる色好み——薰像とその背景——」（紫式部学会編『源氏物語とその前後 研究と資料——古代文学論叢第十四輯——』武蔵野書院、一九九七）や、鈴木宏昌「源氏物語と平中説話」（『源氏物語と平安朝の信仰』新典社、二〇〇八）などがある。

9 新編日本古典文学全集（小学館、④四三二）の頭注による。

10 伊井春樹「夕霧物語の位相——光源氏の晩年を継承する夕霧像——」（『源氏物語論とその研究世界』風間書房、二〇〇二）において、このような夕霧のたくらみを「姑息な手段」「卑俗な方法」と断じ、そのような夕霧像を「晩年の光源氏の形象化」であると論じられており興味深い。尚、夕霧巻の「名」をめぐる論じたものに、岩原貞代「落葉の宮試論——『夕霧』巻の「名」を中心として——」（『人物で読む『源氏物語』第十四巻——花散里・朝顔・落葉の宮』勉誠出版、二〇〇六）がある。

11 夕霧巻の塗籠について論じたものに、たとえば、小嶋菜温子「ぬりごめ」の落葉宮——〈家なき子〉夕霧と、タブーの不在」（『源氏物語の性と生誕——王朝文化史論——立教大学出版会、二〇〇四）、阿部邦宏「塗籠に籠る、落葉宮」（『物語文学論究』一、二〇〇一・一）、鈴木温子「源氏物語『落葉宮』試論——髪と塗籠をめぐる——」（『駒澤国文』三八、二〇〇一・二）、

橋本ゆかり「『源氏物語』の「塗籠」——落葉の宮の〈本当〉の生成と消滅」（『源氏物語の〈記憶〉』翰林書房、二〇〇八）などがある。

12 このあたりの夕霧と一条御息所の意識のずれについては、既に深沢三千男「夕霧巻とところどころ——齟齬と不如意の世界の展開——」（『源氏物語の探究 第十輯』風間書房、一九八五）や金静熙「夕霧と落葉の宮の結婚——錯綜する人間関係——」（『国語と国文学』二〇〇六・四）などにも指摘されている。

13 さらに、夕霧物語のもう一つのプレテクストともいうべき『大和物語』百四十九段に内包されていた問題——男の誤解または無理解——を夕霧巻がみごとに継承したということも考えられよう。『大和物語』百四十九段については別稿を期したい。

14 須田哲夫「『懲りずま』の文学——夕顔・末摘花と平中物語——」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』末摘花）二〇〇〇・一
一）や鈴木宏昌「末摘花」の巻における光源氏像の形成」（注8の書）など参照。

15 『源氏物語』における「伊勢物語」引用のあり方については、拙稿「源氏物語における〈雨夜の品定め〉の意義」（『藤女子大文学雑誌』七四、二〇〇六・三）においても少々論じた。

*本文引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠った。

〈こやま きよふみ・本学教授〉